



▲昨年の消防演習(高松1-16-2 八幡神社)

ねりまの文化財

文化財を火災から守ろう！

第40回 文化財防火デー

1/26

練馬区教育委員会
社会教育課
(文化財係)

☎3993-1111 内線 7141
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

昭和24年1月26日法隆寺金堂の壁画が焼損し、その後も文化財の火災が発生したため、文化財を火災から守る運動が高まりました。昭和30年に「文化財防火デー」制定の運びとなり、以来毎年、全国的に文化財防火デーの行事が行われています。これは、防火運動に止まらず、貴重な歴史遺産である文化財を守り、次世代に継承していく大切さを広く知っていただくための行事です。

▼日時・会場(予定)

○1月25日(火) 午前10時30分

大乗院(西大泉5-17-5)
○1月26日(水) 午前10時
南蔵院(中村1-15-1)
○1月26日(水) 午前10時
長命寺(高野台3-10-3)
※各会場で記念品を配付します。

秋の文化財講座 実施報告

今回は、「江戸の水道―発掘成果から―」というテーマで行いました。

・第一日目〈講義〉11/25(木)

東京都学芸員の亀田駿一氏を講師にお迎えし、江戸の水道の用途や変遷および構造などについて学びました。

・第二日目〈見学〉11/26(金)

水に乏しかった江戸に大きな役割を果たした玉川上水の源である羽村の堰や、羽村市郷土博物館を訪れました。

堰に使われている材料こそ取り替えられていますが、地形を利用したこの堰は江戸時代の様子をうかがうことができます。



旧川越街道の歴史の変遷と

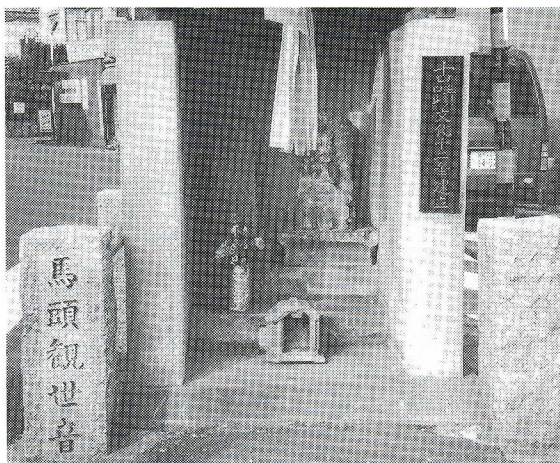
下練馬宿の遺跡について

文化財保護推進員 林 勇

旧川越街道の起源は、室町時代の長祿元年(一四五七)、川越、江戸両城を築城した太田道灌が、川越、江戸間の軍用道路として利用していたのにはじまるという説もあるが確証はない。それから百五十年余を経た江戸時代初頭の慶長年間、徳川幕府は五街道を整備し、併せて川越藩との連絡用道路として活用し、時代がくだるにつれ、川越から松山、熊谷へと、中山道の脇往還としても利用されるようになり街道が形成されていったものと考えられる。

旧川越街道は、江戸四宿の一つといわれた中山道板橋宿平尾の追分を起点として、中山道から分かれ、上板橋、下練馬、白子、膝折大和田、大井の六宿と、野火止、藤久保、亀久保、藤間馬、岸、松郷などの各村を経て、川越城下に達する十一里(四十四軒)の道程である。現在は国道二五四号ができ三十軒程の道程に短縮された。

江戸時代に入って現在の練馬区内には東西南北に通じる道がいくつかできた。その主な



①北町一四四 馬頭観音

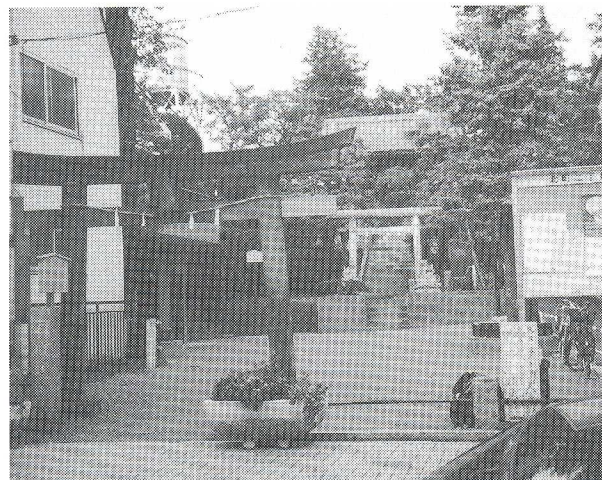
道は、富士大道、清戸道、所沢道、青梅街道、川越街道などである。それらの道は主として、江戸府内への物資の交流に利用されたのであるが、川越街道は、川越藩主の江戸参勤と将軍家が度々川越で行った鷹狩の道筋でもあり、また、穀倉地帯の中心でもあった川越から運ばれる農産物の量も多く街道として重要な役割を果たしていたのである。

さて、上板橋村から下練馬宿に入った川越街道は、下宿、中宿、上宿と宿場を通りぬけ、伊勢原、馬喰ヶ谷戸、大松、久保(旧地名)と、下練馬村の最北端を東西に約二軒程通り

白子宿へと向かっている。

宿場に必要の本陣、脇本陣、問屋場などがおかれたのは、練馬区内では下練馬宿(北町一、二、三丁目)唯一ヶ所だけである。

下練馬宿といわれた現在の練馬区北町の旧川越街道の沿道には、旅人たちの道中の無事と安全を祈った道標、観音像、庚申塔、地藏尊などがあり、それらの石仏、石塔などには、今も信仰心の厚い人々が供える香華がたえない。北町一四四板橋区との区界の四ツ角に馬頭観音が三基ある①。文化十二年(一八一



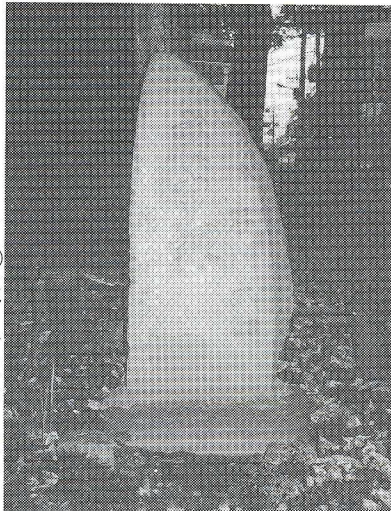
⑥浅間神社

五)の刻造塔の一基には、「右・王子道、左・戸田渡シ道」と道標が彫ってある。他の二基は年号不明の文字塔である。川越街道の商店街を西に進むと左側の不動寝具店の脇に、「従是大道」と彫ってある台石の上に、不動明王の座像が建っている②。宝暦三年(一七五三)に、天下泰平・国土安全を願って建てたものである。左側に「左・東高野山道」の道標がある。練馬区内を北から南西に向かう富士大道道の分岐点である。不動寝具店と街道をはさんだ向かい側に、脇本陣を勤めた名主の内田家と、本陣を勤めた木下家が街道沿いに並んで建てていた③。今は、西友の大きなビルと商店が建ち並んでいる。本陣の向かい側には、お馬屋と呼ばれた問屋場の島野家があり④、その少し先の左側に「がんど宿」と呼ばれる宿が三棟あった⑤。「がんど」の意は、方言辞典などに、空洞「中はがんど」になっている(秋田県地方の方言)とある。おそらく雨露をしのぐ程度の宿ではなかったか。街道をさらに西に進むと右側に、浅間神社と神社の裏側に清性寺がある⑥。現在の東武練馬駅入口の三叉路に石観音堂があり、敷地内に、天和二年(一六八二)に建てられた聖観音座像(区登録文化財)をはじめ年号不明の馬頭観音、庚申塔、石仁王など十四の石造物が配置されている⑦。街道を南へ入った所に

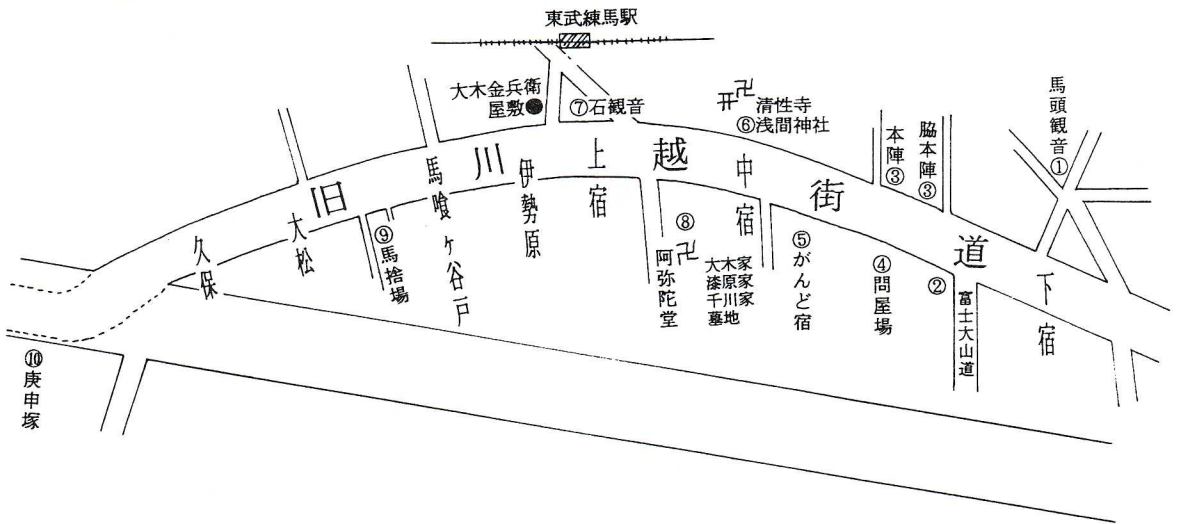
旧家の大木、漆原家と千川家の墓所がある⑧。下宿、中宿、上宿と下練馬宿を過ぎた馬喰谷戸は、馬継ぎを勤める馬喰達が住んでいたという。またこの地に馬捨場があり⑨、その場所と思われる民家の裏側の露路に人目にふれることなく、馬頭観音が二基ひっそりと建っている。

旧川越街道が国道二五四号と交差する地点の、北町八一三七に庚申塚の碑が国道に沿って建てられ、塚の両側に「石・川・江、左・ところ沢」と彫ってあり道標となっている⑩。

このように、旧川越街道下練馬宿の沿道には、数々の石塔や観音像が、ビルの谷間や商家の片隅に今も昔のままの姿で安置され、旧街道の面影をとどめている。



▶ ⑩ 北町八一三七 庚申塚



加藤家と馬頭観音

文化財保護推進員 檜山 月子

大泉学園町二丁目大泉村役場跡の碑を北にいくと馬頭観世音の丸石が立派な柵の中に在ります。そこは、常に掃き濡れられ花が飾られています。「練馬の伝説」に出てくる力持ち惣兵衛の馬頭観音の石仏です。

管理者の加藤ひでさんは語っています。

「先祖の惣兵衛が、愛馬の冥福を祈って建てた馬頭観音は、我家の先祖です。馬も人も一緒です。大切に祭っています。昭和56年3月9日に百四十年祭の供養を主人加藤義治が施主で、大乘院の住職さんを迎え盛大に行いました。柵の修理や力石等を動かした時には、必ず住職さんに供養の経をあげてもらっています。」

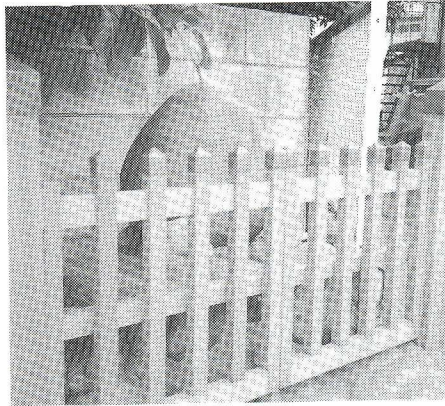
年の始めの正月三日間は、しめ縄をかけ、お神酒や燈明をあげ、朝は雑煮、夜はご飯を炊いて供え、お題目を唱えます。

また、ここを通る度に拝んでいます。「お孫さん達も祖母に見習い、浄財をあげ敬っているとのことです。」

この碑は、加藤さんのみならず、近隣の皆さんにも大事にされています。それは、毎日

の浄財やお茶、椎茸等の供物によく表れています。なお浄財は、一年分まとめて寺院へ寄進しているとのこと。

このように、この石仏は、ひとり加藤家の先祖の石仏に止まらず、町の方々の信仰の場の一つにもなっています。



《お悔やみ申し上げます》

亀井 邦彦さん 46歳
(平成5年12月17日逝去)

練馬区文化財保護推進員・区史編さん
専門委員など。平和台・早宮・氷川台・北町・錦地区を、推進員としてご担当されてきました。

郷土資料室収蔵品シリーズ 第17回

背負い籠

大籠ともいう。口径・高さともに八〇センチ以上もあり、種類の多い農事用の籠の中で、最も大きい。

農家で大量に使う堆肥づくりのため、落葉を熊手でかき集め、これに入れて運んだ。編み目が粗いので、底の部分には小枝を敷き、編み目からこぼれ出るのを防いだ。

また、養蚕の時期には、桑の葉を入れて運んだり、繭の出荷・運搬にも用いた。その他、籠をひっくり返して、ひな鳥を飼育したり、赤ちゃんのおしめ干しに用いたりした。

底を編んだ竹の数によって、八本バサミ・六本バサミなどとよぶ地方もある。写真は、八本バサミの背負い籠である。

